

日本語訳『紅樓夢』における数量詞の研究
A Study on Numerals and Classifiers
in the Japanese Translation of Dream of the Red Chamber

王崗
深圳大学

要旨

中国の古典名作『紅樓夢』については、内外の研究が絶えず行われているが、その日本語訳における数量詞の考察は、管見の限り、まだ十分になされていないように思われる。実際、百科事典的な作品としては、語学的な研究素材が豊富に存在するといえる。本稿では、その中でも特に数量詞に焦点を絞り、「日常的な数量詞」「特別な数量詞」「中国語的な数量詞」の三つの側面から、『紅樓夢』の日本語訳に見られる数量詞の特徴的な意味用法および翻訳の特色について検討を試みる。

キーワード：

数量詞、用法拡張、日本語訳、原著、意味用法

1. はじめに

『紅樓夢』は、中国古典文学の最高峰とされていることから、国内外を問わず広く注目されている作品である。これまで、文学、芸術学、社会学、歴史学、言語学、修辞学、服飾学、庭園学など様々な分野から研究やアプローチが行われてきた。その中で、言語学・修辞学に絞った研究例としては、池間里代子（2012）、陈跃（2020）、胡春艶（2023）、汪楠（2023）などがあげられる。これらの研究では、数量詞を含め、『紅樓夢』の原著における中国語の表現について一通り整理している。

一方、日本語の数量詞は、従来から幅広く研究されてきたロングテーマであるものの、文学作品中の数量詞を対象とした論考は少ない。あえてあげると、吉野孝介（2019）、秦曉麗（2024）、仁科陽江（ほか）（2022）など、数点の考察が見つかる程度である。実際、『紅樓夢』の中では日常生活に関わる場面が多いため、物事を数えるための数量詞も多数登場している。しかし、その数量詞を見ると、現代中国語には依然として活用されるものもあれば、めったに使用されないものも存在する。これに類似した事象は、『紅樓夢』の日本語訳にも見られる。翻訳のテクニクなどの要因も関係しているが、現代日本語に存在する数量詞のほかに、時代的なニュアンスの違いをもつものや、古代日本語にしか見られないものも散見される。

以上のように、『紅樓夢』の原著およびその日本語訳に用いられている数量詞は、様々な意味できわめて多彩な表現を呈しているといえる。以下では、日本語の数量詞に関する従来の研究をまとめたうえで、主に『紅樓夢』の日本語訳¹に見られる数量詞の意味表現や使用特徴に焦点をあてて検討する。

¹ 本稿で検討する日本語訳の『紅樓夢』は、伊藤漱平によって訳され、平凡社より1963年に発行されたものである。なお、その全訳本は、分量が膨大なため、ここでは上巻のみを対象とする。

2. 今までの研究の整理

2.1 日本語の数量詞について

前述の通り、これまで日本語の数量詞に関する研究は多く、様々な視点からの分析がなされてきた。

李所成（2013）では、同じ存在表現であるが、中国語の場合はものが通常、不定の意味を表わす数量詞「一個」を伴う必要があるのに対して、日本語の場合は特に数を問題にしない限り、ものが通常、数量詞「一個」を伴わない。これは日中両言語における数量詞「一個」の働きの違いと関係があることは言を待たないが、より根本的には、日中両民族の出現、存在、消滅するものに対する捉え方の違いと関わっているであろうと結論している。

戴紅（2018）では、日本語と中国語において細長いものを数える時に用いられる類別詞「本」と「条」を対象にそれぞれのカテゴリーの中で、中心的成員から周辺の成員までどのように拡張されているかを考察した。これによると、「本」と「条」の中心的成員から周辺の成員までの拡張プロセスは類似しているものの、「本」は形が見えない事柄にまで拡張され、「条」は細長い形のイメージが消えないこともわかった。「本」と「条」は同じ細長いものに用いる類別詞ではあるが、カテゴリーの成員の構成が違い、実際の用法にも様々な相違点が見受けられることを明らかにしている。

李月明（2020）では、日本語の類別詞「粒」の範疇化プロセスを中心に中国語との対照考察を行った結果、日本語では「丸くて小さいもの」を範疇化する際、主として類別詞「粒」を用いる。一方、対訳する中国語の分類類別詞は、「ゼロ次元・点」に近い立体物に注目する「粒」「顆」と「丸」、「三次元・立体性」に注目する「块」、「個体性」に注目する「个」、「状態/個体性」に注目する「只」と「モノの量」に注目する計量類別詞の「滴/点」などがあって、日本語のそれと対比すると、かなり細分化されていることがわかる。また、「粒」の意味拡張プロセスは、「粒」のプロトタイプの成員のイメージ・スキーマ「丸くて小さいもの」が、「類似性」の連想というメタファーに動機づけられ、「周辺の範疇」、「他の範疇」へと拡張していく過程と考えられる。

以上の諸研究を見ると、「一個」、「本」、「粒」などの個別的な数量詞の分析にとどまっているものがほとんどであり、数量詞に関する包括的な検討がなされていないように思われる。また、臨時数量詞や「二筋の眉」のような特徴的な表現も取りあげられていない。

2.2 文学作品における数量詞について

日本の小説や、日本語に翻訳された中国の小説などにおいて使用される数量詞に注目した研究がある。

吉野孝介（2019）では、日本語小説の中国語訳に基づいて「一」を伴う数量表現の特徴について考察した。日本語との対照の視点から中国語の「一」を伴う数量表現の使われやすい場面として、①「初登場（人物・事物）」を特化する場合、②「話者の評価」を焦点として表す場合、③「程度」と「量」を焦点として表す場合だと指摘した。

秦曉麗（2024）では、日本文学作品に使われている数量詞に焦点を当て、原文と中国語訳文を照らし合わせながら、日中両言語の数量詞の違いを、① 助数詞について、訳文では原文に比べて約 1.7 倍の種類の助数詞が使われ、個々の名詞に適切な助数詞が分析的に用いられていた。特に和語「〜つ」について、中国語では様々な助数詞を使い細かく訳し分けられている。② 原文の数量詞について訳文では代替表現に訳され、様々な言葉や決まり文句などを使い、より自然な中国語らしい文に訳している工夫が見られるとまとめている。

洪安瀾（2021）では、中国語における量詞の語用的な機能について、イギリスの小説『ハリー・ポッター』の英語、日本語、中国語バージョンの比較を通して分析を加えた。その結果としては、中国語では話者の直観的な感性的認識、あるいは反省的な悟性的認識を数量表現、言語環境などの手段によって伝えるが、英語と日本語は、数を強調して報告する場合に限って、「one」「一個」が必要になるので、事物の「数量」と「種類」を区別して発話するということが取りあげられた。

仁科陽江（ほか）（2022）は、中国の作家・莫言の小説『蛙』の日本語訳を中心に、中国語の数量詞の翻訳方略を取りあげているが、最も多く用いられている翻訳方略は削除と帰化であり、転位と借用の比率は低いと指摘している。また、翻訳方略のうち、「借用」だけが起点テキスト志向に属し、残りの3つの方略は目標テキスト志向に属している。さらに、起点テキスト志向の借用は全体のわずか1.7%にすぎない。このように、『蛙』における数量詞の日本語訳の方略は、明らかに目標テキスト志向であることが示されている。

以上の研究は、いずれも中国や日本の小説およびその翻訳作品における数量詞の用法や翻訳方略に言及している。しかしながら、これらの成果は、第一『紅樓夢』に直接関係するものではなく、中日両言語における数量詞表現の時代的なギャップや、日本語訳における中国語的な数量詞の使用などについては触れていない。以下では、日本語訳『紅樓夢』における数量詞について、本稿の取り組みを提示する。

3. 日本語訳『紅樓夢』における数量詞の整理

『紅樓夢』には数量詞が多く含まれているため、一つ一つ集めるのは容易なことではない。本稿では、記録漏れが多少あったかもしれないが、その数量詞を一通り収集した。以下の表1は、その結果であるが、整理を単純化、可視化するために、主に量詞（助数詞）を中心にまとめた²。

² 表中の量詞については、基本的に『数え方の辞典』（飯田朝子 2004、小学館）および『中国語量詞 500』（武柏索（ほか）1995、中華書店）にそれぞれ量詞として掲載されているか、または現時点における日本語および中国語のウェブサイトで一般的にヒットするかを基準で判定を行った。また、表中の「備考」に記載した「名量詞」は名詞を修飾するものであり、「動量詞」は動詞を修飾するものを指す。なお、「～塊」、「～品」などは、それぞれ対応する日本語の同形数量詞とは用法や意味機能が大きく異なるため、「中国語的なもの」に分類した。

表 1 『紅樓夢』（上巻）における量詞の整理

分類	量詞（先出順）	備考
日常的なもの	～回、～つ、～字、～個、～かた、～首、～行、 ～人、～年、～時間、～株、～組、～番目、～ 曲、～羽、～声、～席、～献、～度、～日、～ 通、～月、～軒、～画、～面、～間、～品（ひ ん）、～着、～包（み）、～代、～句、～こと （言）、～杯、～種、～匹、～筋、～反、～列、 ～棟、～遍、～日間、～分（ぶ）、～対、～件、 ～冊、～枚、～本、～はり（張）、～幅、～そう （艘）、～たび、～粒、～足（あし）、～色、～ 口（くち）、～皿、～台、～幕、～式、～脚、～ そろい、～挺、～等（とう）、～名、～カ所、～ 局、～部、～たば（束）、～歩、～節、～ぜん （膳）、～篇、～瓶、～輪、～酌、～歳、～煎、 ～輜、～通り、～服、～きれ、～階	（～（三） 時）など訳 注中の日本 語の量詞を 除外；動量 詞・名量詞 の区分はし ない。（以 下同様）
特別なもの	～丈、～両、～尺、～更、～疋、～刻、～里、 ～さし、～銭、～文、～升、～厘、～畝、～斤	（～匁）な ど訳注中の 日本語の量 詞を除外。 （以上、以 下同様）
中国語的な もの	～盤、～張、～塊、～碗、～家、～かめ（甕）、 ～品（ほん）、～卓子、～程、～錠（銀塊の単 位）、～桶、～札、～拝	

（注：文末注解中の量詞も含む）

表 1 から明らかなように、『紅樓夢』における量詞は、多様な形態で現れている。「～つ」や「～羽」のように、現代日本語でも日常的に使用される量詞もあれば、李月明（2020）、秦曉麗（2024）などの従来の研究では触れられていない「～丈」や「～更」も含まれる。さらに、「～桶」や「～家」のように中国語的な量詞をそのまま用いている例も見られる。ここからは、『紅樓夢』など古典作品ならではの数量詞の用法の一側面が伺える。

4. 日本語訳『紅樓夢』における常用数量詞

表1の「日常的なもの」に例示されている数量詞は、現代日本語においても比較的身近に目に触れるものである。その中で、例えば「～つ」「～枚」などについては、これまでかなり研究が進められてきたものがある一方、「～声」「～筋」など、まだ十分に注目されていないものも存在する。そこで、以下ではこれら後者の数量詞二組に焦点をあて、『紅樓夢』の日本語訳においてどのように表現されているのかを考察する。

ア. 「～声」と「～筋」

日本語には、「～声」がたしかに量詞として使用されている。ただし、飯田朝子(2004)の分析によると、「～^{こえ}声」と言うときに、「相手に対する呼びかけを数えます。数詞は、もっぱら「一^{ひと}」を用います」(p.348)と、「～^{せい}声」と言うときに、「声や音の発せられた回数を数えます」(p.358)³という傾向があるようである。しかし、「ふりがな文庫」に収録された作品の中で、振り仮名が振られた語句のみを対象とした集計によると、「一^{ひとこえ}声」の読み方の割合は58.2% (+「ひとこゑ」9.0%)で、計65作品中約40作を占め、「二^{ふたこえ}声」の割合は68.8% (+「ふたこゑ」25.0%)で計18作品中約17作を占め、「三^{みこえ}声」の割合は83.3%で8作品中の約7作を占めている⁴。これらのデータから、日本の(近代)文学作品においては、「～^{こえ}声」と読む割合が「～^{せい}声」より圧倒的に高いことが一通りわかった。この点を踏まえると、名詞の「一^{いっせい}声」を除けば、数量詞の「～声」が大体「～こえ」と読むのが普通ではないだろうか。したがって、飯田朝子の上記の指摘には再考の余地があるだろう。

次に、本稿では「YAHOO!JAPAN」の検索サイトで調べたところ、「一声」のほかに、「二声」、「三声」、「四声」(いずれも「～^{こえ}声」と読まれそうな表現に限定)といったヒットが非常に少ないことを発見した。「ふりがな文庫」に収録されている作品は近代のものが多く、そこにはたしかに「二声」「三声」のような表現が見られるが、現代日本語においては、上述のサイトで示されたように、これらの表現はしだいに姿を消しつつあると考えられる。

³ 発声の順番、音楽の旋律、中国語の声調などを示す「～^{せい}声」は対象外とした。

⁴ <https://furigana.info/w/二声>、<https://furigana.info/w/三声>、<https://ja.hinative.com/dictionaries/一声> (2025-10-24 閲覧) を参照した。

一方、中国語では、「一声」だけでなく、「二声」や「三声」もごく普通に使用され続けている。このような中国語的な表現特徴は、日本語訳『紅樓夢』にも映り出されているようにみえる。以下にその例を示す。

(1) とつづけさまに二声 三声呼びかけましたが、秦鐘は見返す力もありません。(p.171)

(2) 紅玉はこれを聞くと、二声 三声冷笑して、... (p.280)

上記の「～声」の表現は、『紅樓夢』の日本語訳にいくつか見当たることから、近代日本語の用法機能をまだ保持していると考えられる。この中で、

(2) のようなケースは、日本語の「～声」の従来用法からやや逸脱しているといえる。というのも、日本語では「冷笑」など、「笑う」声の回数を表す際に「～声」を用いることは基本的に少なく、限定的であるからだ。したがって、もともと日本語には存在しなかったか、または限定的だった「～声」の表現機能が、『紅樓夢』の日本語訳において拡大されたことを示唆している。(2) の用法の拡張は、中国語で発達した量詞「～声」が原著のまま翻訳された結果で生じた現象かもしれないが、同じ量詞であっても、場合によっては用法の広がりが可能になることも示唆される。

もう一つの「～筋」というのは、「一筋ののれん」という言い回しが示す通り、細長く分かれて垂れるものを数える際に用いられる表現である。また、「一筋の光」「一筋の涙」など、細くて連なるものに使われるほか、「川が一筋流れている」のように、川や道のように長く続くものにも「～筋」という量詞が用いられることがある。『紅樓夢』の日本語訳にも、次のような該当事例が見られる。

(3) つぎにはまたいくつかの浮雲と一すじの流れを画き、そのことばには... (p.53)

しかし、同訳には「～筋」の非典型的な用例が次のようにあげられる。

(4) 丹鳳を思わせる切れながの双の三角眼、柳の葉にも似た二筋の下り眉。(p.29)

日本語では、「一筋」のほかに、「二筋の糸」や「三筋の滝」などの表現が用いられることがあるが、「眉」を「～筋」で表現することはめったにないと思われる。この意味で、日本語訳の『紅樓夢』において「～筋」の用法が拡張されているといえるだろう。これは、原著小説に忠実な訳者の訳風によるものが一因になるかもしれないが、同時に、当該文章のリズム感や前後の句の対称性、描写の精妙さを重視した訳者のレトリック手法も影響しているのではないかと考えられる。

イ. 「～首」と「～つ」

日本の漢詩や和歌などの詩歌作品は、和語量詞「～つ」のほかに漢語量詞の「～首」でも数えることができる。が、『紅樓夢』の日本語訳における詩の計数においては、この二つの量詞がともに使用されている。以下にそれぞれの例を示す。

- (5) 「金陵十二钗」と命名したのですが、さらに四行詩一つ書きつけて、題詩としました。

でたらめの書とは見せて しみとおる辛酸のなみだ
いわばいえ 作者を痴と たれかこの味わい知らん (p.6)

- (6) その弓には香櫞（丸仏手柑）が掛っていて、やはり詩が一首記してあります。

二十年を操ただしく生きてこし ざくろ花いま大宮に咲きほこる
三つの春いかでおよばん初春に ゆき会える虎と兎もゆめの世ぞ
(p.53)

では、なぜ同一小説における詩作の計数単位が「～つ」で示されたり、「～首」で示されたりしたのだろうか。この謎を解くためには、両量詞の成立を少し吟味する必要がある。

まず、「～首」である。昔の中国では、『楚辞・九章』、『詩経』三百篇』などの表現に見られるように、「～章」や「～篇」で詩歌を数えた（今日でも長編の詩歌は「～篇」で数えることがある）。一方の「～首」は、本義が「頭」であり、人体の最上部に位置することから「物事の始まりや中心、リーダー、最も重要な位置」なども意味したり、人の数を計量したりする

ようにも転じてきた。ここにおいて量詞としての機能が果たされるようになった。そして、「～首」は文章や処方（しやうふ）の量詞として初めて使用された記録は、「蒯（くわい）通者，善為長短説，論戦国之権変，為八十一首。」（漢・司馬遷『史記・田儼列伝』）、「此人邪乱，急以方藥助之，寻上七首，内自求之。」（唐・王明『太平經聖君秘旨』）など中国の漢・唐時代にまで遡れる。また、今までの史料によると、中国東晋の詩人孫綽（314年～371年）が『悲哀詩序』に「不勝哀号，作詩一首」と最初に詩歌の計数単位で「～首」を使ったそうである。以来、詩歌の計数単位として「～首」「～篇」「～章」が使用されていたが、明や清を経て民国時代になると、「～首」は詩歌や曲の単位として定着してきている⁵。

中国から伝わった漢詩の影響を受け、日本独自の詩歌である和歌が生まれた際にも、この「～首」が数える単位として流用された。これは、『万葉集』巻五「梅花歌三十二首并序」という詩序の数量表現からもわかってくる。

次に「～つ」である。三保忠夫（1995、2006）によると、和語量詞の「～つ」は、奈良・平安時代にはもう使われており、『日本書紀』『万葉集』などにおいて古訓も含んだ使用例が紹介されていた。ただし、当時の「～つ」は、中国語の「～首」と同じく、対応範囲が広がった。「一匹」や「一口」にも「ひとつ」と「～つ」で訓まれたようである。「～つ」で和歌や詩などを数える例は平安時代にも確認できる。例えば、紫式部日記第7話「和歌一つづつ仕うまつれ。さらば許さむ。」のように「～つ」で和歌の数を表現している。ということは、「～つ」が詩歌の単位になるのは、「～首」と同じく、いずれも長い歴史があったことを物語っている。現代日本語にも、例えば2014年公開の日本のドキュメンタリー映画『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』のタイトルに見られるように「～つ」で詩作の数を表すことができる。ちなみに、中国語では日本語の「～つ」にかなり対応する「～个（個）」で詩歌には用いられない。

⁵ 古今詩詞天地：“首”専門用于詩歌数量的来歴、<https://wx.httpcn.com/info/html/202019/CQRNMEAZILKO.shtml?timestamp=1759374708850> (2025-10-02 閲覧)を参照した。なお、文中の日本の詩歌例は、サイト「YAHOO!JAPAN」から入手したものだが、ヒットが多くて、初出がわからないため、その出所を控えておいた。

日本の和歌や詩に用いられる「～首」と「～つ」の使い分けについては、これまで言及された研究がないようで、その表現上の差異などには未解明な点が残っている。しかし、それらを漢語と和語の違いから捉えれば、両者の区分をある程度究明することが可能であろう。

周知の通り、奈良・平安時代では漢字を用いていたのは貴族の男性であったが、仮名文字は多くの女性にも用いられていた。また、当時には漢字が公的文書などに使われた一方で、仮名文字は手紙を書き記す際などの私的な場面で使われた。このため、平安時代中期以降には日記文学や随筆、物語などの女流文学が発展していったのである。こうした文字の使用特徴は、結局、日本語における漢語と和語の使い分けに影響を及ぼしたと思われる。これについて小森和子（2013）の指摘があった。それによると、漢語は改まり度の高い場面の時に使い、和語は改まり度の低い場面で使うという認識を抱いている人が多い。また、語感としては、漢語は知的で格調高い、書き言葉に用いられることが多く、和語はやわらかく、話し言葉に用いられることが多いという傾向が見られる。陶萍（2012）でも「和語助数詞「つ」は今日、日常によく用いられており、書き言葉より平易な会話の世界で多用される」（p.29）と述べている。

これらの記述にそってみれば、紫式部は女流作家で、その日記がプライバシーな物事を記録したもので、その中に柔らかくて話し言葉的な「～つ」を使ったことも、『谷川さん、詩をひとつ作ってください。』が文字通り会話体の文章なのでそこに「～つ」を使ったこともわかってきた。これに対して、日本最古の歌集である『万葉集』の巻五「梅花歌三十二首并序」は、どちらかといえば、重厚で奥深い響きを持つ格調の高い文学作品で、しかも漢字で表記されたものであるため、「～首」で数えることになったのではないだろうか。ちなみに、「百人一首」には「～つ」ではなく、「～首」が用いられたのは、優雅で洗練された古典の傑作であったからだろうと思われる。

ここまで長く続いた記述を踏まえ、『紅樓夢』の日本語訳における詩歌に目を向けると、「～首」と「～つ」の使い分けについて、ある程度の傾向を突き止めることができる。

前記(5)であげた四行詩の原詩は、「滿紙荒唐言，一把辛酸淚。都云作者痴，誰解其中味？」のようになり、『紅樓夢』の冒頭の第一回に記されている詩である。この詩は、人生における浮き沈みや悲喜こもごもを、荒唐無稽な「言葉」や切なる「涙」で描き尽くしている。人生の苦悩や辛酸に加え、音吐朗々と読み上げる平易な詩的言葉で、多くの読者の心に共鳴を呼び起こすことになる。『紅樓夢』に登場する数多くの詩の中で、この詩がとくに大衆的に広く知られるようになったのは、そのためではないだろうか。つまり、高尚な格調よりも、わかりやすく平明な詩風によって、その普及度を高めたと考えられる。また、この詩に込められたそういう表現上の特徴から、訳者は「～首」ではなく、語感的にもっとも近い「～つ」を選んだのだらうと推測される。

(5)とは対照的に、(6)では知的な漢詩のような趣きを感じられる。全詩としては、やや晦渋で硬いようなニュアンスがする。これは、この詩が登場人物のその後の人生展開をそそのかすための判詞の詩なので、後続のストーリーと繋がらないと、理解しづらい箇所が含まれるからである。とくに「三春争及初春景，虎兎相逢大夢歸」の二句は、表面的意味は問題なく読み取れそうだが、実際に何を暗示しているのかは、『紅樓夢』の各人物像や全体の物語を読まないとおそらく結びつかないだろう。この点からも、この詩は決してわかりやすく平明なものではないように思われる。そのため、当詩を計数する際に「～つ」ではなく、「～首」を用いたのではないかと推測される。

(5)および(6)の分析は、『紅樓夢』のほかの該当する詩作にもおおそ適用できると考えられる。例えば、「そこで最初に四行詩を一首、題されました。面白や 山川を よくぞ活かせし いかばかり 工夫かけし事ならん 天が上 人の世と 景そなわれる よき園に 大観の名をばあたえん」(p.194)、「まず、詩をひとつ。一足を 踏みあやまりぬ つかのまに百年かぞう 昔と今と 風月のかがみ 黄泉に泣くはかず知れず」(p.133)という二つの詩作においては、わかりやすさや知的な格調の高さなどによって、それぞれ「～首」と「～つ」で区分されていることが読み取れよう。

上記の通り、『紅樓夢』の詩歌に対して漢語系と和語系の数量詞を適切に使い分け、訳し分けることにより、当該詩歌に潜む見落とされがちな細部の特徴や言外の意味、背景にある趣をより精妙に伝えることができる。

5. 日本語訳『紅樓夢』における特別な数量詞

日本語訳の『紅樓夢』には、「～丈、～両、～尺、～更、～疋、～刻、～里、～さし、～銭、～文、～升、～厘、～畝、～斤」など、現代日本語では一般的に使用されないものや、中国語の同形数量詞と意味機能が異なるものがある。本稿では、これらを「特別なもの」として一部検討を試みる。

5.1 古代の日本で使用されたもの

『紅樓夢』には、かつての日本で使用されていたが、現代日本語ではほぼ消えつつある数量詞として、「～両、～文、～刻、～更」があげられる。『紅樓夢』は中国の清朝を背景とした作品であるため、その時代特有の物事を数えるための数量詞が当然あったわけである。例えば、銀貨や薬の質量を計量する「～両」「～文」がその代表例である。時刻を計算する「～刻」と「～更」も同様であるが、「～両」「～文」に比べて一般の日本語話者になじみにくいため、『紅樓夢』では注付きの形式で表現されている。次に例を示すので参照されたい。

- (7) 賈の旦那は今日の五更（三時―五時）時分、もう都へ向けご出立なすったとかで... (p.12)

以上のように、『紅樓夢』においては、時代的な色合いの濃厚な数量詞が用いられることがある。これは、時代物の物事の数や単位を効果的に伝え出すために必要な工夫と考えられる。例えば、「～両」ではなく「～グラム」や、「～更」ではなく「～（夜）七時～九時」などと表現すると、『紅樓夢』という古典小説の風格や歴史的背景にそぐわず、奇妙に感じられることになるだろう。

ちなみに、日本語と対照的に、中国語では「～両」と「～刻」が現在でも使用されている。前者は依然として黄金の重さや酒の量を計る単位になっているが、後者は「15分」を「一刻」と表現するなど、時間の単位として用いられている。

5.2 意味用法の変化を見せたもの

日本語と中国語には同一の語形をもつ数量詞が使用されているものの、その表現機能や意味用法が多少異なるケースが『紅樓夢』に確認されている。

ア.「～疋」

先に例を示す。

- (8) 銀子二包と錦の緞子四疋をお礼として士隱の妻に届けてき...)
(p.17)

「～疋」(現代中国語では普通に「～匹」と書く)は、中国語でも日本語でもいずれも布地を計量する量詞ではあるが、長さにおいて両者が少し食い違う。さまざまな説があるが、中国語の「～疋」は「～丈」よりも長くて、「1 疋=10 丈=33 メートル」という等式で示される長さにおおよそあたる。これに対して、日本語の「～疋」とは、中国語と同じく布の長さの単位であり、「二反」の長さに相当するものであるが、「1 反」は約 10.6 メートルで、「1 疋」は約 21.2 メートルに相当する。日本語訳の『紅樓夢』には、中国語と同一語形の量詞「～疋」が使用されてはいるものの、前述のように中日両言語の間には長さの差が明確に存在する。理想的な数量詞の翻訳としては、一対一の完全な対応がもっとも望ましいが、実際には操作が困難な場合が多い。(8) のように意味に若干の差がある場合でも、文章の理解に支障をきたさないのであれば、原語のままで表現されることが十分に可能である。ただし、中国語では「～疋」が布を計量する一般的な表現であるのに対し、日本語の「～疋」は主に日本の和装業界で使用されているように思われる。

イ.「～さし」

つづいて、「～さし」に触れる。この語は、舞の曲数、相撲などの番数を数える際に用いられるものであり、一般的には通貨の単位としては認識されていないだろう。しかし、『紅樓夢』の日本語訳においては、次のように「清錢」(清朝錢)を数える単位として用いられている。

- (9) 別にまた穴あき錢一さしをとり出させると、それをそっくり劉婆さんのまえに運ばせました。(p.74)
- (10) そのほか反物二十四反、清錢一百さしは、賈の後室・奥方の王氏はじめ諸姉妹の部屋つきの乳母や侍女たちへのくだされ物です。
(p.198)

ここの「～さし」は、原著の数量詞「～串」に対応するように訳出されたが、相撲の番数などを数える「～さし」の伝統的な表現ではない。ここの用法の成立はおそらく「銭さし」「百文さし」の「さし」に関係しているだろうと考えられる。

この場合の「さし」は、穴あき銭をまとめておくためのわらや麻のひもを指す。これは意味上、穴あき銭に通すひもを指す中国語の「串」にちょうどあたる。意味が近く、同じく銭に用いられるものであるため、「～串」が「～さし」と訳出されたのであろう。また、中国語の「串」は、その「ひも」の意から転じて、「ひもを通して棒状に束ねた穴あき銭」を数えるための量詞としても古代中国で用いられていた。一方、(9)(10)における「一さし」「一百さし」の言い方からは、「～さし」がここで臨時的に量詞の機能を担うようになったのではないかと推測される。この点から考えてみると、「～さし」と「～串」の表現機能にはかなり一致しているところがあると言える。なお、『紅樓夢』では、(9)(10)と同様に臨時量詞として用いられる「～さし」が数個確認できるため、日本語の元来の「～さし」の用法が拡張されたと考えられる。

これまでの分析から明らかなように、中国語の数量詞を日本語に翻訳する際には、意味や機能が類似している日本語の名詞などの表現を臨時的に量詞として扱うことも、一つの有効な対応策となりうる。

6. 日本語訳『紅樓夢』における中国語的な数量詞

『紅樓夢』では、表1のように中国語的な数量詞を一定の割合で使用している。これはやや意外に思われるかもしれないが、翻訳において比較的一般的な技法である。この訳法について、河原清志(2014)による引用の文献において、「一般的な翻訳ストラテジーとして、直接的翻訳と間接的翻訳を挙げている。」「直接的翻訳 (1) 借用：起点言語の言葉がそのまま目標言語に転移される。」(p.122)と記されている。ここでの「借用」とは、『紅樓夢』の日本語訳において「～家、～かめ(甕)、～程(道のり)」など、中国語特有の数量詞がそのまま使用される翻訳法にあたる。借用は、原語の意味を忠実に再現したり、新しい物や概念を消化吸収したりする際に使われる訳法であるが、『紅樓夢』では、以下に示すように、中国語の一部の数量詞に対して、日本語に適切な表現が存在するにもかかわらず、訳者があえて中国語のまま使用したケースも見られる。

ア.「～張」と「～卓子」

まず、「～張」である。日本語では、椅子を数えるときに、「一つ、二つ」と数えても間違いではないが、「一脚、二脚」と数えることが一般的である。『紅樓夢』の日本語訳にもそのような文例が見られる。

- (11) と、早くもそこへ下人が大きな丸椅子を一脚かかえこみ、どっかと靈前に据えました。(p.144-145)

しかし、同訳では、次のように、「～張」という椅子の計数単位ではない表現が用いられている。

- (12) 床には十六張の楠の交椅が二列に列んでいます。(p.32)

ここの「～張」は、明らかに椅子を数える量詞として用いられている。中国語では、「～張」(「～張」)が椅子やテーブルなどを数える一般的な量詞である。一方、日本語の「～張」は、弓、テント、蚊帳などを数えるものであり、椅子を数えるための量詞ではない。この点から考えると、(12)の「～張」は、主に中国語からの影響によって生まれた言い方だと推測される。日本語訳において、「～脚」ではなく、「～張」という椅子の計数単位に適さない量詞が用いられたのは、普通の日本語話者にはなじみにくいだろう。しかし、なぜこの「～張」が日本語訳で考案されたのかと考えると、特別な意味合いを強調するためではなかったかと推察される。

周知のように、「楠」(くすのき)というのは、古くから家具や仏像に用いる木材として重宝されていたが、これを用いて作られた椅子は、「栄国邸」の「栄禧堂」には16もある。つまり、「栄国邸」が非常に豪華な大邸宅であることをほのめかしているのである。その派手でぜいたくな様子を際立たせるために、訳者は意識的に一般的な「～脚」を避け、中国語の「～張」(「～張」)をそのまま用いたのではないかと推測される。興味深いことに、(12)も含め、椅子を数える「～張」が全部で五個登場しているが、そのいずれも『紅樓夢』の第三回で、主要人物の「林黛玉」が全書の筋展開の主要な舞台である「栄国邸」にはじめて入って行った際に目にした屋敷内の各施設の記述に現れている。繊細で敏感な「林黛玉」にとって、大豪邸の「栄国邸」の豪華さはどれもこれも目を見張るほどのものであった。その驚きや豪邸の華麗さを引き立たせるために、訳者が意識的に「～張」を使ったのではないかと考えられる。

次に、「～卓子」である。「卓子」は日本語では名詞であり、「つくえ、食卓、テーブル」などを意味する。言葉としては辞書にも掲載されているが、日常的に使うケースはほとんどないと思われる。この語の語源とされる中国語の「桌子」はいわゆる量詞と名詞の兼類語で、日常的によく用いられる。そして、名詞の場合では「机、テーブル」の意であり、量詞の場合では「宴席のテーブル」などを数えるものになり、「两桌子菜」(二テーブルの料理)のように使用される。意味用法が日本語の「卓子」に非常に近いため、『紅樓夢』にはそのままで以下のように訳出された。

(13) まもなく周瑞の妻女が一卓子の客料理をいいつけにいて... (p.73)

(14) 李紈と王熙鳳のふたりは奥の間で別の一卓子につきました。(p.241)

二例とも「～卓子」が数量詞のように用いられているように見受けられるが、実際の日本語では「一卓子」「二卓子」といった表現はほとんど使われない。代わりに、「一卓」「二卓」のほうが伝わりやすい。「～卓」とは、机やテーブルの数え方の一つであり、特に複数の人が集まって食事や会議、共同の活動を行うテーブルに対して用いられる。「卓」という漢字は、「食卓」「円卓」といった言葉にも見られるように、単なる物を置く台というよりも、人々が集う場としての意味合いが強い。そのため、宴会場などで、人々が囲んで使うテーブルを数える際に「一卓」「二卓」と表現することが適切だとされている。ここで問題となるのは、訳者がなぜ日本語話者にとって親しみやすい「～卓」を使わずに、「～卓子」という表現を選んだのかという点である。

思うに、『紅樓夢』は古典作品であるため、日本語にも存在するやや古風な表現「～卓子」を用いることで、小説の格調にふさわしいと考えた訳者の意図があったのだろう。また、もう一つの理由として、「一卓子」が日本語において数量詞としては一般的に捉えられないものの、日本語話者にとって理解しやすいという点があげられる。さらに、字体こそ違え、中国語の「一桌子」と形式上および意味上でほぼ完全に対応しており、臨時的に数量詞の機能も果たせることから、訳者は「～卓子」の導入を決定したのではないかと推測される。

イ. 「～桶」と「～碗」

「桶」は、大体、円筒形木製の容器を指すものであり、日本語において名詞であり、数量詞だとはされない。これに対して、中国語では「一桶水」「二桶大米」のように「～桶」が数量詞として使用されうる。こういった用法特徴は、『紅樓夢』の日本語訳にも示されている。

(15) ふたりで一桶の水をさげ、片一方の手では衣裳の裾をからげ、...
(p.264)

(15)における日本語の「桶」は、数量詞ではないものの、中国語の「～桶」の意味合いと完全に一致しているため、そのまま訳出されたのである。実際に「ふりがな文庫」でアクセスした結果、「ひとをけ」を含め、合計で5例の「一桶」の用例が確定できた⁶。ただし、「二桶」や「三桶」といった表現例は確認できていない。これらの点から見ると、日本語の「桶」はまだ一般的な量詞としては十分に確立されていないと考えられる。一方で、(15)やほかの事例を考慮すると、この場合の「～桶」は名詞というよりも数量詞的な性質が目立っている。したがって、少なくとも日本語訳の『紅樓夢』においては、「～桶」は臨時の量詞として機能しており、ある意味で日本語の「桶」の元来の使用範囲を広げたと解釈できる。

次に「碗」である。これは、飯や汁物などを盛るための食器で、円形で深さがあり、片手で持てる器を指す。日本語においては名詞であり、数量詞ではないが、「ふりがな文庫」を閲覧した結果、「一碗」の文例は2例のみであり、「二碗」や「三碗」の例は見られない⁷ことから、これだけでは「碗」は完璧な数量詞だとは言いにくい。また、インターネットで検索をしてみたところ、「一碗」のほかに、「二碗」から「五碗」までのヒットはいくつか見つかったが、いずれも頻度は高くなく、「三碗の才」(または「三碗の才」)や「五碗三皿」のような熟語や慣用表現が目立つ。つまり、「碗」は数量詞としてまだ十分には発達していないと考えられる。

日本語の「碗」とは対照的に、中国語の「～碗」は、完璧な数量詞である。これに影響されているためか、『紅樓夢』の日本語訳には「碗」の数量詞的な表現が数個見つかった。

⁶ <https://furigana.info/w/一桶> (2025-10-26 閲覧)。

⁷ <https://furigana.info/w/一碗> (2025-10-26 閲覧)。

(16) 宝玉はこれをたてつづけに二三碗もお代りして、こんどは碧粳米の粥を半碗ばかり食べました。(p.95)

(17) そこへちょうど襲人が、料理を二碗持っではいってきて、宝玉にこう言います。(p.394)

ここにおいて、「～碗」は、先の「～桶」と同様に、『紅樓夢』において数量詞的な機能を果たしているため、その元来の意味や用法を拡大していると考えられる。そして、訳者による気軽で自在な翻訳技法により、上記の(15)～(17)における該当する数量詞的表現も、支障なく理解できるようになっている。

7. おわりに

本稿では、『紅樓夢』の日本語訳における数量詞について考察した。全体を通じて、『紅樓夢』には非常に豊富な数量詞が用いられており、その用法機能や意味表現などには特徴的な側面が伺える。例えば、『紅樓夢』の日本語訳における「～声」「～筋」の用法では、この二語の固有表現が拡張されているところが見受けられる。また、『紅樓夢』の日本語訳においては、中国語原著と同一の語形をもつ数量詞を用いるケースも見られるが、実際には両者の間に意味や用法の相違が生じていることも、本稿の考察から明らかになった。さらに、『紅樓夢』の日本語訳では、「～碗」「～桶」などを臨時数量詞として使用したり、「～張」で椅子を数えたりするといったケースも確認されており、まさに中国語の数量詞をそのまま日本語に移入するような事例と言える。

上述の通り、日本語訳『紅樓夢』においては数量詞の表現が極めて豊かに体现されている。ただし、『紅樓夢』に登場する数量詞は膨大な数にのぼるため、1編の論文でその全てに言及することは困難である。例えば、同訳における数詞「一」を伴う数量詞の多用、「～徑」「～庭」など中国語の臨時数量詞への対応処理、さらに『紅樓夢』日中英三言語版における数量詞の対照研究などは、いずれも研究の価値のある課題である。今後の考察においては、これらの点に言及し、更なる深掘りを行っていきたいと考えている。

引用資料

『紅樓夢』（上巻）、伊藤漱平（訳）、平凡社、1963

参考文献

- 飯田朝子（2004）『数え方の辞典』小学館
- 池間里代子（2012）「『紅樓夢』の文体的特徴：宴席での表現を中心に」『流通経済大學論集』46（4）、85-95
- 汪楠（2023）「浅析《红楼梦》的语言艺术」『漢字文化』3、147-149
- 河原清志（2014）「翻訳ストラテジー論の批判的考察」『翻訳研究への招待』No.12、121-140
- 洪安瀾（2021）「中国語における量詞の語用論的考察」『中国言語文化学研究』第10号、49-62
- 胡春艷（2023）「『紅樓夢』前八十回における形容詞重疊式の構文機能」『中国言語文化学研究』第12号、155-168
- 小森和子（2013）「漢語と和語の違いに関する中国人日本語教員の認識」『明治大学国際日本学研究』第5巻第1号、19-38
- 秦曉麗（2024）「日漢対訳から見た数量詞表現をめぐる工夫：日本文学作品を対象として」『東アジア言語文化研究』第8号、54-62
- 戴紅（2018）「細長いものに用いる類別詞「本」と“条”の考察——日本語と中国語によるものの捉え方の相違を探る——」『日本アジア研究』第15号、23-46
- 陈跃（2020）「《红楼梦》中名量词“个”的语法意义探析」『宁夏师范学院学报』8、46-52
- 陶萍（2012）「助数詞に見る意味分野別語彙構造：「一つ」と「一個」との比較を通して」『論究日本文学』96、29-42
- 仁科陽江、鄧雨潔（2022）「中国語における数量詞の翻訳方略：莫言『蛙』の日本語訳を中心に」『日本通訳翻訳学会第23回年次大会予稿集』、8
- 武柏索、王淑文、周国強（1995）『中国語量詞500』中華書店
- 三保忠夫（1995）「日本書紀における助数詞について」『鎌倉時代語研究』18、武蔵野書院、79-107
- 三保忠夫（2006）『数え方の日本史』吉川弘文館
- 吉野孝介（2019）「中国語の慣用表現における【“一”を伴う数量表現】の用い方に関する考察」『言語と文化』13、73-82
- 李月明（2020）「日中数量類別詞の範疇化機能の対照研究——日本語の「粒」を中心に——」『比較日本学教育研究部門研究年報』第16号、106-112
- 李所成（2013）「日中存在表現における数量詞「一個」について」『研究会報告』第34号、113-122